

酒類ガイドライン遵守推進本部だより

ほろにかが

平成 27 年 8 月 11 日
全国卸売酒販組合中央会
酒類ガイドライン遵守推進本部

「新ビジョン推進委員会」開催に際して

委員 喜多 和生

去る7月28日に、中央会の今年度に入って最初の委員会として、「新ビジョン推進委員会」が、昨年度に引き続き「新ビジョンの普及・定着への取組み」と「中央会の今後のあり方」を主な議題として開催されたが、委員の方々には大変熱心に議論いただき感謝している。その冒頭に、私は委員長として次の様な主旨の挨拶を述べた。

「量から質への転換」を副題とする現在の新ビジョンは改訂版であるが、そもそも12年前に新ビジョンを発刊したのは、酒類流通の真ん中に位置する卸業界が、業界全体を俯瞰出来る立場にあることを背景に、酒類業界全体に対し、業界の将来に向けてのありべき姿を提唱したものである。その前提として、提唱した卸組合内のベクトルが全て同じ方向を向いているのが大前提であるが、然るに最近それが崩れつつある。即ち、商社系全国卸のMS社が東京以外の卸組合の役職を全て降りると申し出られたことである。一地方の中小卸ならまだしも、全国的に多大な影響を及ぼす業界のリーディングカンパニーのこのような動きは、新ビジョンどころか、卸組合及びその全国組織である中央会の存立にも多大な影響を及ぼす由々しき事態ではなからうかと。

私が理事長を務める大阪卸酒販組合の事務局へ、理事とガイドライン遵守推進委員を辞任したい旨の申し出があったのは去る4月であった。事務局がその理由は何ですかと問うと、本社からの指示に従ってであり、全国での動きであるとのこと。それだけでは納得がいかないと伝え、過日、理事を務めていただいているご本人と直接話し合う機会を得た。

その中で辞任の真の理由を聞かせて頂けるものと期待し、納得すれば辞任受理もやむなしで臨んだが、またもや本社の指示に従っての一点張り。話し合いは平行線のまま終わった。

その時点で受理していないのは全国で大阪ともう一組合のみとのことであったが、大阪には他地区と違う背景がある。大阪においては、MS社の前身のRS社が府内の卸三社を併合し、その後MS社が誕生したので、合計四社を併合されて現在に至っている。その各社はほとんどが大手卸であり、組合活動にも協力的であり、内二社には副理事長として執行部を支えていただいていた。それだけに、今回の辞任は大阪組合に与える影響、とりわけ市場問題に及ぼす影響は大きく、ハイそうですか、とは言い難いのである。

本社の指示としかおっしゃらないので推測するしかないのだが、MS社では、卸酒販組合には同社が活動されている他の業界団体に比べ、かなりの不満や物足りなさや時代遅れと言う感覚をお持ちなのだろうか。もし仮にそうであるならば、役職を辞するのではなく、積極的に参加して改革を図るのが責任ある立場の者の対応ではないだろうか。

私自身、13年前の理事長就任の挨拶で、「組合の強い業界にろくな業界はない」と言った程だが、卸酒販業界としての主張を出来る唯一の団体であることに加え、酒類業組合法に基づく法定組合であることを考え、業界人としての責務として組合活動に携わってきた。

更に、古い話で恐縮だが、1990年代の大阪において、当時の大手卸は組合を軽視し、任意の別組織で市場問題等を論じていたが、それは良くないと判断で、大手卸が中心となって組合執行部を編成し、商社系の社長が理事長に就任いただいた歴史がある。時代や環境が違ってしまうえばそれまでだが、MSご本社の「大人の対応」を期待し、お待ちしたい。